令和六年春季号

日本刀

現存の優品

97

現存の優品 ⑨⑦ 目次

刀　無銘　岩戸一文字（元徳―備前）鎌倉末期……3
太刀　則成（建長―備前）鎌倉初期……4
脇差　無銘　伝金行（応安―美濃）南北朝中期……6
短刀　無銘　伝長谷部（延文―京都）南北朝中期……7
脇差　無銘　大和志津（南北朝前期―大和）……8
刀　九州同田貫上野介（文禄―肥後）桃山時代……9
鐔　寿翁（花押）／四子隆生　復卦之年　達磨透し図（幕末）……10
小柄　命奉安政五戊午孟春水府住萩谷勝平刻　和歌に桜花図（幕末）……11
鐔　長州萩之住　金子善左衛門／清正作　牡丹透し図（江戸後期）……11
小柄　如竹門人　則虎　猛虎図（江戸後期）……11
鐔　無銘　京献上　桐鳳凰図（江戸中期）……12
小柄　平田春就（花押）東ね熨斗図（江戸後期）……12
鐔　越前住　記内作　能面透し図（江戸後期）……13
鐔　無銘　古赤坂　竹透し図（江戸前期）……13
小柄　一琴（花押）柳下時鳥図（幕末）……14
鐔　無銘　稲川派　群馬図（江戸中期）……14
鐔　無銘　吉岡　桐紋透し図（江戸中期）……15
鐔　無銘　水戸　九曜紋散し図（幕末）……15
鐔　七十叟守平（花押）昭和四十四年己酉長月　雷公の図（現代）……16
小柄　無銘　平田　東ね蓮図（幕末）……16
脇差　於南紀重国造之（江戸初期―紀伊）……17
刀　肥前国住藤原忠広（初代銘）（江戸初期―肥前）……18
脇差　井上和泉守国貞／（菊紋）寛文元年八月日（江戸前期―大坂）……19
刀　肥後守秦光代／以地鉄鎖作之（寛文―尾張）江戸前期……20
槍　戸川達富使　武蔵太郎安国作之
血吸不知骨　宝永五戊子年（江戸中期―武州八王子）……21
脇差　長曽祢興里入道虎徹／寛文十二年八月日（江戸前期―江戸）……22
刀　奥和泉守忠重作（宝永―薩摩）江戸中期……23
刀　粟田口近江守忠綱／延宝二年二月日
二ツ胴土壇越至平地斬者小松十右衛門（江戸前期―大坂）……24
刀　薩伯耆守平朝臣正幸／寛政五年二月日（江戸後期―薩摩）……25
刀　川部儀八郎藤原正秀（花押）（刻印）／文化十二乙亥二月吉日
余之於石井氏交情日旧而石井氏之
於刀剣耆好誠厚矣於是乎鍛以贈之（江戸後期―江戸）……26
短刀　宗次作（天保―江戸）江戸後期……28

●価格は説明文の末尾にあります

表紙題字：「日本刀」　東大寺長老　故・清水公照師筆
表　　紙：『鑽工廿八気象』北尾紅翠斎画より

ご挨拶

昨年の秋に『現存の優品』⑨⑥を発行し、即売会を夏から秋に移しました。今回は、年二回ということで四月の発行、即売会ということになります。よい気候ですので、お時間がありましたらどうぞお立ち寄りください。

当店の銀座も、京都と同じで人があふれてきており、週末土曜の歩行者天国の銀座大通りなど、本当に人で一杯です。外人さんが多いですが、日本人もたくさんで、もういつまでもこもっていられないのでしょう。

銀座のいろいろな店の様子も変わりました。コロナのあとで、物価の高騰、世代の交替など、変わりやすい時なのかもしれません。レストラン、食事処など特に変わったように思います。きれいになるのはよいのですが、値上げもすごいですね。諸経費が高くなっているのでしょう…

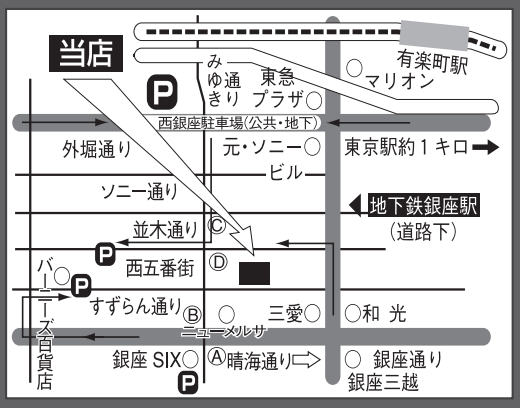
今回のカタログは、前回にもまして優品が揃ったと思っております。どうぞ、ゆっくりご覧ください。

令和六年四月　柴田光隆

銀座・刀剣柴田　**春季即売会**

令和６年（2024年）
４月５日(金)６日(土)・８日(月)９日(火)
●７日(日曜日)はお休みさせていただきます。

【会期中の営業時間】朝10時～夜６時



●当店への交通は――
地下鉄銀座駅から徒歩１分、
ＪＲ有楽町駅から徒歩８分。
東京駅からでもタクシー５分、
基本料金で来ます。

＊お車では、上記４ヵ所の駐車場が便利です

〒104-0061　東京都中央区銀座５－６－９　☎03(3573)2801
ホームページ：http://www.tokensibata.co.jp　FAX 03(3573)2804

ご送金のご案内

①三井住友銀行／銀座支店　普通預金　7038644　(株)刀剣柴田（とうけん しばた）
（送金手数料、お引きください）
②郵便局／振替口座　00190―7―52891　刀剣柴田
（必要でしたら振替用紙、ご請求ください）

刀　無銘　岩戸一文字

（元徳―備前）

鎌倉末期　約六九〇年前

鎬造り　刃長二尺二寸五分（68㎝）反り五分五厘
元巾九分　先巾六分二厘　重ね二分一厘

大磨上げにやや細身で鎬高く、先反りつき小切先の姿で品がよい。地鉄、板目に流れ交じり、地沸つき、映りが地映り風にさかんにつく。刃文、小丁子に小乱れ交じり、高いところは飛焼にもなり、匂い勝ちに小沸がからみ、足入り砂流しかかる。全体に下方に逆がかる乱れも交えて焼きが高く、物打ち辺はややおとなしくなる。帽子、直ぐ調に表は掃きかけ裏は小丸。

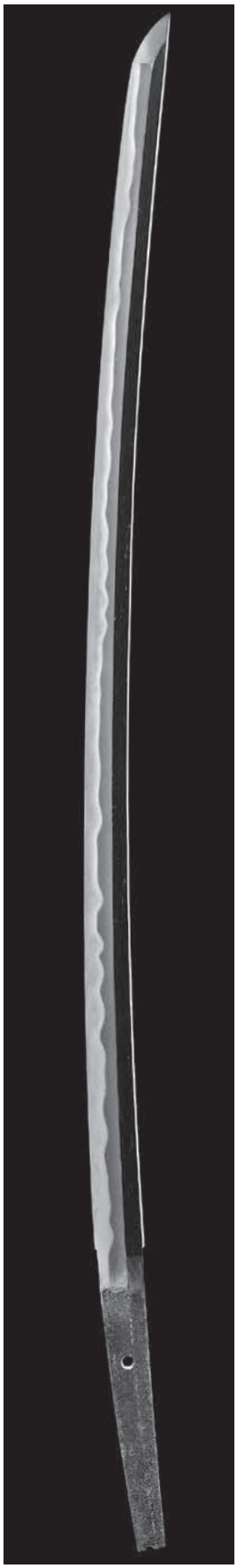
鎌倉時代の備前物の流れは一文字派と長船派である。一文字派は以後南北朝期にかけて福岡・吉岡・片山・岩戸などの地に繁栄し、多くの良工が輩出した。その鎌倉末以降に備前岩戸庄に在住した小規模な一派を岩戸一文字と呼ぶ。昔は正中一文字と後醍醐天皇朝の年号で称されていたものである。祖を吉氏とし、一派の吉家に備州岩戸庄の銘で元徳年紀を有するものがある。作風は丁子が小ずむなど同時期の吉岡一文字に通じるものがある。拵は黒呂鞘の尋常な打刀拵で、平戸国重風のがっしりした真鍮鐔がよく目立つ。

金着二重鋼　拵付（白鞘もあり）

佐藤寒山博士鞘書あり（昭和51年）

特別保存刀剣鑑定書付　二五〇(250)万円

●価格は海外から、漢数字は分らないといわれ、算用数字も入れました。ご了承ください。



全身を除いて原寸

●次頁に続く

●前頁・岩戸一文字の拵

黒呂塗鞘打刀拵〈頭〉獅子図　鉄地　高彫　眼に金色絵〈縁〉清乗と銘あり　雲龍図　赤銅地　高彫　金色絵〈目貫〉旅人と猿図　赤銅地　容彫　金色絵〈鐔〉牡丹唐草・雲龍図　真鍮地　角木瓜形　鋤下彫　耳・波文を深彫り〈柄〉白鮫着深緑色巻（拵の総長　九七㎝）

太刀　則成（のりなり）

（建長―備前）

鎌倉初期　約七七〇年前

鎬造り　刃長二尺一寸九分（66・2㎝）反り六分強　元巾一寸　先巾六分四厘　重ね二分弱

鎌倉初期、備前・福岡一文字の生ぶ在銘の太刀という稀有な一振である。身巾頃合いで、鎬高く重ねはやや薄く、腰反りついて踏張りがある太刀姿。地鉄、板目に杢交じって錬れ、肌目がよく見え、地沸ついて乱れ映りが鮮明にたつ。刃文、焼きの高い沸・匂い深い互ノ目に、丁子・小のたれを交えてよく乱れ、飛焼きかかり、刃中足入り、金筋・砂流しかかる。帽子、のたれて小丸。

この則成は、銘鑑に福岡一文字・建長頃とあるものに該当する。則成は一文字の中にあっても高名な工ともいえないが、けっこう在銘の名品が残されており、重美が一振、重刀にすでに四振、うち一振は特別重要にまでなっている。

一般に福岡一文字と称されるものでも古い時代のものを特に古一文字と称しており、作風は古備前に近いものとなる。則成の作を見ると、小銘と今回のような大ぶりの銘のものがあり、小銘のほうが古く古一文字の時代に入るようである。しかし今回の作は銘字が大きく鮮明に残されており、これをしげしげ見てみると福岡一文字の祖といわれる則宗の銘に近い。また作風も近い。一門であったと思われ、本作は古一文字より少し時代が下がり、まさに福岡一文字といってよい。一般に一文字というと華やかな刃文を思い浮かべるが、案外、焼刃高くさかんに乱れる作は少ない。本作は則宗を範にとり力一杯乱れさせ、映りも表出させたものなのであろう。かつ、この古い時代であるのに、在銘で生ぶの太刀姿で残されているのはまことにめでたいことである。

拵は、幕末の黒呂鞘の打刀拵としている。特別に高級なものではないが、目貫に後藤の凝った品が入っている。

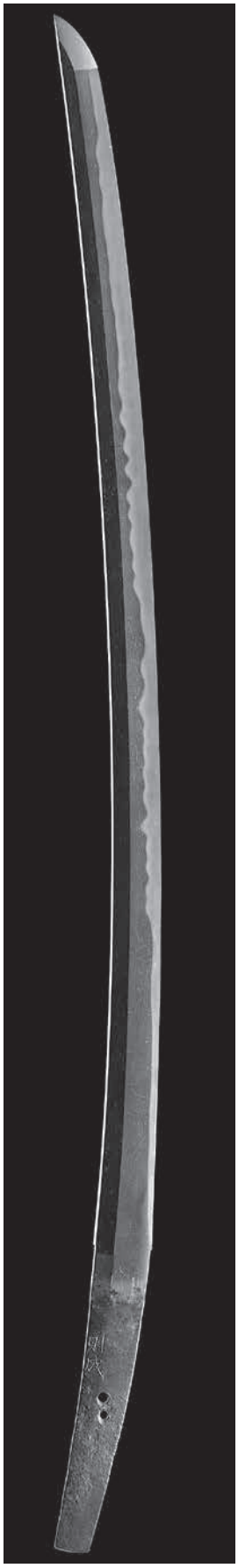
重要刀剣（平成2年・第36回）

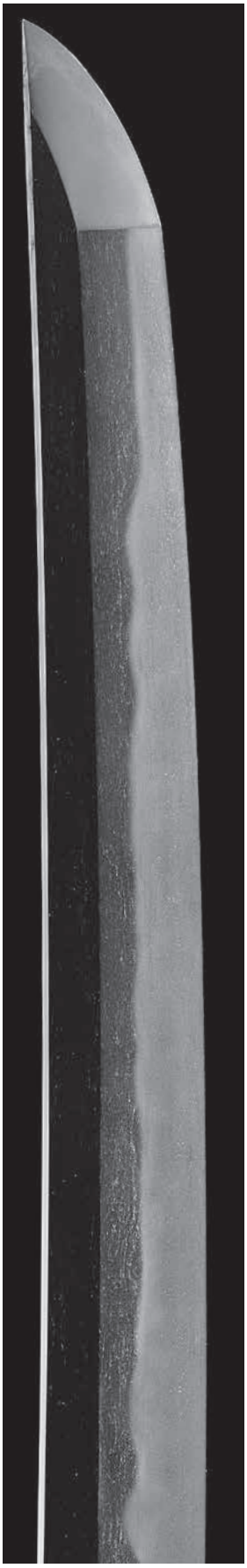
銀着二重鎺　拵付（白鞘もあり）　一、四〇〇（1,400）万円

黒呂塗鞘打刀拵

〈縁頭〉龍図　赤銅七々子地　高彫　金色絵　〈目貫〉弓懸図　赤銅地　容彫　金色絵

〈鐔〉武州住正房　薙刀図　鉄磨地　長丸形　肉彫透し　金布目象嵌　〈柄〉白鮫着納戸色巻（拵の総長　九四cm）





全身を除いて原寸

脇差　無銘　伝金行（きんこう）

（応安―美濃）

南北朝中期　約六五〇年前

平造り　刃長一尺〇寸八分強（32・7㎝）　反り一分強　元巾一寸一分七厘　先巾八分七厘　重ね一分八厘

いかにも南北朝らしい寸延びの体配に、身巾広く、反りややつき、重ねは薄い。表に三鈷付剣、裏に梵字と護摩箸の彫りがあり、姿整う。地鉄、板目で刃寄り棟寄りに柾が交わり地沸がつく。刃文、小のたれが規則的に連らなり、小沸つくも匂い口締りごころで、こまかい砂流しかかり、明るい。帽子、のたれ込み、表は掃きかけ、裏は尖って返る。

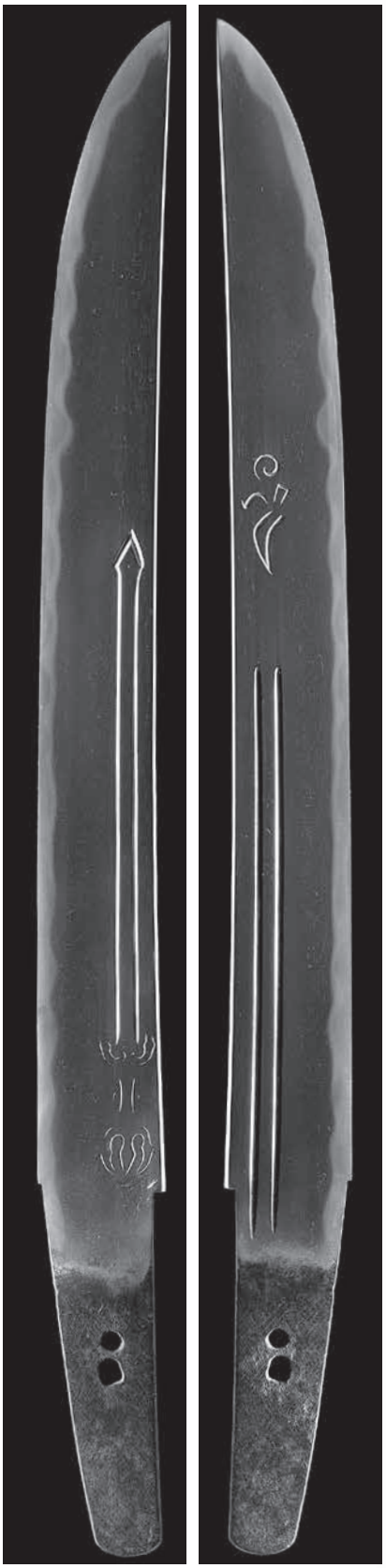
室町期から新刀期にかけて刀剣界に大きな足跡を残した美濃鍛冶。その源は南北朝期の志津兼氏と金重（きん じゅう）といわれている。今回の金行はその金重の子、または弟と伝える刀工で、よく師風を継承している。ただ有銘作は伝わっておらず、本作の刃文に見るように、沸がついて頭の丸い腰の開いた浅い互ノ目が連れるのは金重一派の共通の見所である。

本作も無銘であるが、見るからに、ただものでないという雰囲気ただよっている一振である。地鉄・刃文に金行の特徴がよく表れ、また拵も朱黒の五分刻み鞘に素銅の一作金具、それに鐔は鉄を透かしてひねるという立体的に作った作で、全体異風で作行がよく、内外ともに自慢できる一振となっている。

金着二重鑢　拵付（白鞘もあり）

重要刀剣（昭和52年・第25回）証明書のみ

本間薫山博士鞘書あり　**二四〇（240）万円**



全身を除いて原寸

朱黒変り塗刻み鞘脇差拵〈総金具＝縁頭・栗形・返り角・裏瓦・小尻〉定紋唐草図　素銅腐らかし地　鋤出彫〈目貫〉定紋図　素銅丸形　鋤出彫〈鐔〉糸巻図　鉄地　木瓜ひねり形　透し彫〈小柄〉糸瓜に虫図　素銅石目地　薄高彫　金・銀色絵〈笄〉欠く〈柄〉茶鮫着黒糸片手巻（総長六〇・五㎝）

短刀　無銘　伝長谷部（はせべ）

（延文―京都）

南北朝中期　約六六〇年前

平造り　刃長八寸一分半（24・6㎝）反りなし　元巾七分六厘　先巾五分三厘　重ね一分九厘

小ぶりの短刀で、身巾頃合いに、無反りで重ね薄い。地鉄、板目肌立ちごころとなり、刃寄り、棟寄り共に柾流れが交じり、地沸つく。刃文、小丁子・小互ノ目・小乱れ交じり、特に裏側は途中盛り上がって飛焼きかかり、烈しい棟焼きからも皆焼（ひたつら）風といってよい。小沸ついて匂い深く、砂流しさかんにかかる。帽子、乱れ込んで先き大丸で掃きかけ、返りは長く、鋒元まで強い棟焼きとなる。

南北朝期を代表する山城鍛冶は、了戒の流れを汲む信国派と、もう一つは長谷部派である。後者は国重・国信が著名であり、特に長い太刀においては国信のほうが多く残されている。作風は特徴あるもので、同時代の相州広光・秋広と同じく皆焼刃を得意としている。全体として、のたれに互ノ目主体の刃取りであり、帽子が丸く、返りを際立って長く焼き下げる。また柾が刃寄りと棟寄りに見られるのが鍛えの手癖である。本作は無銘であるがまさに掟通りの作風で、拵も品のよい合口拵が添えられており、いかにも古刀の短刀といったところである。

銀台金鍍金二重鋒　拵付（白鞘もあり）

保存刀剣鑑定書付　七〇（70）万円

全身を除いて原寸

白出鮫黒呂塗鞘短刀合口拵〈黒漆塗角〉〈目貫〉桐紋二双図　赤銅地　容彫　金色絵〈小柄〉一路平安図　素銅磨地　金・銀・赤銅　高彫色絵〈柄〉白出鮫（拵の総長　四四㎝）

脇差　無銘　大和志津（やまとしづ）

（南北朝前期―大和）

約六七〇年前

鎬造り　刃長一尺八寸五分強（56㎝強）反り五分強

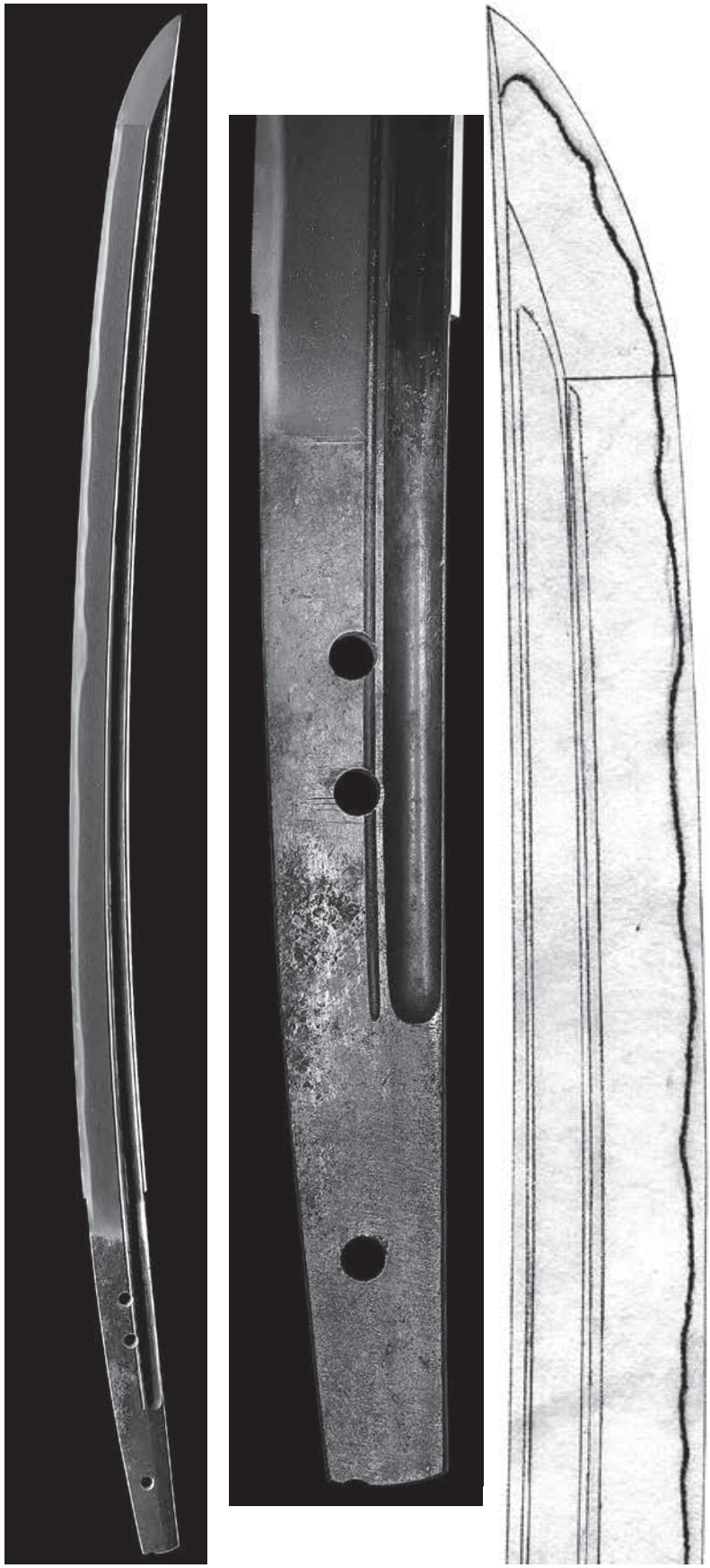
元巾一寸　先巾八分　重ね二分

大磨上げながら長寸の脇差で、身巾広めに重ね薄く、元先の巾差少なく腰で反り、先反りもついて大切先。表裏に棒樋と添え樋を掻き堂々として美しい姿。地鉄、板目に杢を交えてよくつみ、刃寄りに流れ交じり、地沸細かくついて地景入る。刃文、焼き低めの直ぐ調に浅いのたれを交え、小沸つき、ほつれ・二重刃・喰違い刃等入り、砂流しこまかにかかり匂い口明るい。帽子、浅くのたれ大丸調に返る。

鎌倉末期の大和手掻派の鍛冶・包氏（かねうじ）という刀工が、美濃に移って兼氏と改銘し、志津三郎と号して美濃刀の祖となる。大和志津とは、本来はこの包氏が大和にいた時の作ということであるが、志津に同行せず大和に残留した者にも包氏を名乗る工が存在し、それらを含めていつごろからか、その一門や弟子たちを一括して指す言葉となった。本作はのたれ調刃文の大和志津の典型的作風で地・姿とも優れる。

重要刀剣（平成30年・第64回）

金着二重鎺　白鞘　二二〇（220）万円



全身を除いて原寸

刀　九州同田貫上野介（どうだぬきこうづけのすけ）

（文禄―肥後）

桃山時代　約四三〇年前

鎬造り　刃長二尺二寸九分強（69・4㎝）反り六分弱
元巾一寸五厘　先巾七分八厘　重ね二分四厘

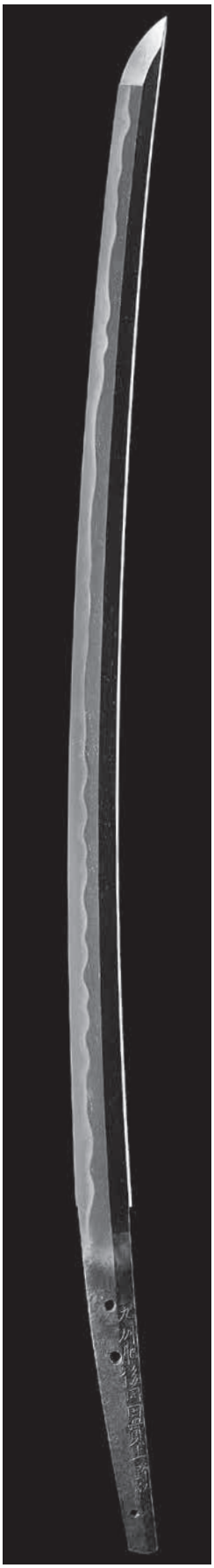
わずかに区（まち）を送るも定寸で、身巾広く重ね厚く、鎬高く反り深くつき、中切先の延びる頑丈な姿。地鉄、板目に柾ごころを交え、よく錬れて地沸が厚くつく。刃文、焼き巾広めの互ノ目にのたれや小乱れ交じり、沸づき、ほつれや砂流しさかんにかかる。帽子、乱れ込んで掃きかけかかり、返り長い。

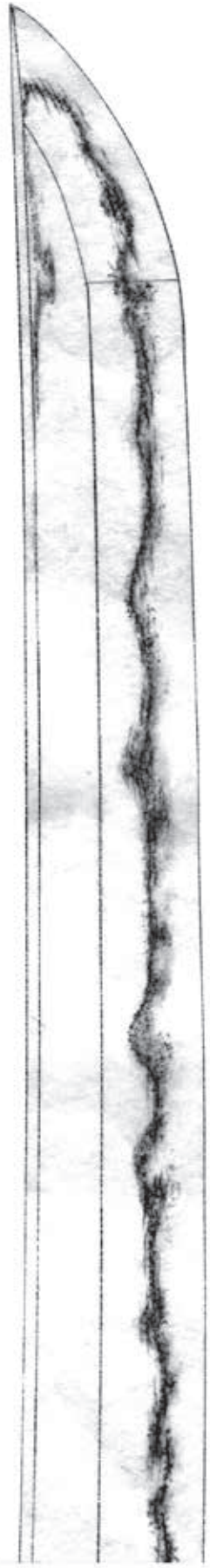
人気の高い同田貫の刀で、今では多言を要するまでもなく刀の代名詞の一つとなっている。一派の最盛期は加藤清正公時代で、その中心が本作の上野介正国である。この一派には豪快な刀とともに、二尺有余の大身槍・薙刀も多く、いかにも武張ったものである。本刀は同田貫でも上作の品で、佐藤寒山博士の鞘書があるのだがほとんど消されており、ただ一番下に「宇垣纏中将より拝領」とだけ残る。太平洋戦争時の連合艦隊参謀長の名で、なるほどそういう人の手にあったのかと十分に頷ける優刀である。

特別保存刀剣鑑定書付

佐藤寒山博士鞘書あり（消えかかっている）

金着一重鎺　白鞘　　二八〇（280）万円





全身を除いて原寸

●価格は海外から、漢数字は分らないといわれ、算用数字も入れました。ご了承ください。

鐔　寿翁（花押）／四子隆生　復卦之年

達磨透し図　鉄地　撫で木瓜形　透し彫　肉彫　金・銀・素銅象嵌色絵　耳・金象嵌

独特の羊羹のような色合いの鉄地に、耳際を雲形に鋤残し、洞窟に籠り修行する禅宗の祖・達磨大師を肉彫して透かす。大師の顔と払子を銀色絵、かぶる緋衣を素銅色絵する。耳輪と草を金色絵し、中心孔の上下の素銅口紅に金砂子象嵌。鐔耳に「岸石ニ　窮屈ヲスル達磨ドノイカ井尊者ト気ノ毒ニ候」と、一休禅師の狂歌を金象嵌する。

寿翁・田中清寿は東龍斎派の祖で、文化元年生。正乗（後藤清乗の門人）の門人と古書に記し、河野春明に有縁。後年に「東龍斎風」と称する洒脱な彫技を生み出し江戸で一派を成す。多くの子弟を養成し明治九年73歳で没。銘文の四子隆生復卦之年の復卦は八卦（易占い）の陽が一つの形で「一陽来復」に通じ、もとに戻る意から還暦を表し清寿61歳の作と推測される。本作は「西の一乗、東の清寿」と称され、江戸の通人に絶大の人気があった幕末の名工・清寿の江戸趣味あふれる傑作鐔。作域はともかく、一乗に比べると清寿の作品は圧倒的に少ない。また小ぶりな鐔が彼の本分でもある。幕末。

◆縦六八・七㎜　横六二・三㎜　厚さ四・六㎜

特別保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　二四〇(240)万円

耳の金象嵌
反対側にもある

小柄　命奉安政五戊午孟春水府住萩谷勝平刻

和歌に桜花図　赤銅磨地　毛彫　高彫　金象嵌色絵
裏・赤銅磨地

漆黒の赤銅磨地に金で桜の花を二輪散し、片方は高彫、も一つを平象嵌。それぞれに小さく花弁も散らし上部には霞を線象嵌する。中央、二行の毛彫の和歌が本作の主題で、本居宣長の「志紀島のやまと心を人とは婆阿さ日ににほふ山左九ら波那」を流麗に彫る。裏の銘も「命奉…」から始まるのであるからただものではなく、こちらは謹直な楷書である。

勝平は水戸金工の祖・谷田部通寿の弟子・篠崎勝国の系統で、天保15年、40歳から藩の御用彫物師となった。江戸後期に隆盛を極める水戸金工であるが、この勝平に至ってその堅実華麗な作風で江戸・京の一流金工にも負けない作品を生み出すようになる。本作は出来もよいが和歌と銘文が特別で、当時水戸の国学的史観の空気を如実に知ることができる（戊とあるので明治元年戊辰の十年前）。幕末。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り　四十五(45)万円

文字がよく見えるように撮影

小道具写真は原寸です

鐔　長州萩之住　金子善左衛門／清正（きよまさ）作

牡丹透し図　鉄地　変り撫角形　肉彫透し　金・銀布目線象嵌　金点色絵　耳・角耳小肉

鉄地に牡丹花を大図で精巧に肉彫透しする大作である。花弁の一枚一枚に花脈をしっかりと毛彫し、花弁の縁は肉彫風にして花弁の重りに陰影をつけ、金点色絵を散らして露を置く牡丹花の瑞々しさを表現する。葉は葉脈を金線象嵌と目立たないが銀線象嵌し、葉の表裏を巧みに描く。

清正は長州鐔を代表する家系の一つ、幸重を祖とする金子家の四代目。作風は父祖と似て肉彫地透しの工法が多く丁寧で、中井友恒と並ぶ上手である。長州鐔は藩の政策もあり、規格的な作が多くみられるが、本作は特別に大きく、構図がよくて手が込んでおり、清正が思いのたけを駆使した入念作といえよう。江戸後期。

◆縦九三・九㎜　横九一・三㎜　厚さ五・二㎜

特別保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　二十八(28)万円

小柄　如竹（じょちく）門人　則虎（のりとら）

猛虎図　赤銅縮緬石目地　高彫　片切彫　毛彫　金色絵　裏・赤銅磨地

ごくこまかな赤銅縮緬石目地に、堂々とした猛虎を高々と据紋し金色絵する。隆々たる虎の胴体を片切彫とこまかい毛彫で力強く表す。虎の目つきは鋭く、いどむような姿で、今にも雄叫びをあげて飛び掛かりそうな迫力である。

本作・則虎の師匠は村上如竹。天明ごろの江戸の名工で、蝶、蜻蛉などの据文・平象嵌などでよく知られる。弟子に正則やこの則虎などがいて一派をなす。今回の作に見る縮緬石目地とはたいへん手間がかかり、この派の得意とするところで、また主題を大模様に据文象嵌するのも特色である。江戸後期。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り　二十八(28)万円

鐔　無銘　京献上

桐鳳凰図　鉄磨地　撫角形　金布目象嵌　耳・角耳小肉金象嵌

鉄磨地に、地が見極められないほど絢爛豪華に桐鳳凰図を金布目象嵌する。また桐・鳳凰ともにその特徴を細密に線彫している。鳳凰は想像上の瑞鳥で梧桐に宿り、竹の実を食し、醴泉を飲み、優れた治世の兆しとして出現するという。

献上鐔には諸説あるが、作品はほとんど無銘で、鉄地に濃密な金布目象嵌を施し、京や阿波の正阿弥に類似したものである。この鐔はこの流派の典型的な作であり、金象嵌の剥落もなく、耳にまで金象嵌を施して入念で出来がよい。図の桐鳳凰というのも献上鐔という名にまことにふさわしい。江戸中期。

◆縦六七・四㎜　横六一・九㎜
厚さ四・五㎜
特別保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　三〇(30)万円

小柄　平田春就（花押）

束ね熨斗図　赤銅七々子地　高彫　金色絵　裏・哺金時雨鑢

目の詰んだ赤銅七々子地に熨斗鮑図を高彫し、色合いを変えた金でそれぞれ色絵する。熨斗の一部に傷を彫り入れるなどリアルに描く。熨斗は鮑の皮を薄く桂剥きし、引き伸ばして乾燥させる。それを束ねて神事の供え物や儀式用の肴に用いたが、のちに伸ばす行為から「延」＝永続の意をこめて贈答品に添えられるようになった。

平田春就は七宝の平田家の八代目。家督相続し彦四郎を襲名、徳川幕府から七宝工として扶持を支給される。一子相伝の七宝の技法のほかに、安田家に彫金を学び、高彫・色絵の技法で精巧な鐔・小柄を作るなど平田派としては珍しく、また多才な工である。天保十一年六月没。本作は意匠に優れ、格調高い小柄である。江戸後期。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り　二十五(25)万円

鐔　越前住　記内（きない）作

能面透し図　鉄地　変り椀形　肉彫透し　耳・肉彫

鍛えのよい椀形の鉄地に能・狂言の面を五面肉彫透しする。鐔裏に特徴があり、面の裏側をくりぬき、目に孔をあけて紐を絡ませ、それぞれの面を結ぶようにしている。能面の般若・小面・中将、顎髭がある翁、そして狂言面のギョロ目の賢徳を、それぞれ特徴をふまえリアルに彫る。

記内は越前鐔の代表工。六代続くというが代別は難しい。一般に記内は鐔裏に銘を切ることになっているが、本作は椀形で鏨が打ちづらかったのか銘の線が細くなっている。今回の能面透しは記内を代表する図柄で、鐔愛好家には広く知られる。お面を彫るため鐔まで浅い椀形にするなどは、手にとってみないことにはわからないことである。江戸後期。

◆縦七五・八㎜　横七四・六㎜　厚さ五・五㎜
特別保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　**三〇万(30)円**

鐔　無銘　古赤坂

竹透し図　鉄地　丸形　透し彫　毛彫　耳・丸耳

鉄錆良好な地に力強く竹を透かす。厚みがあり耳際の繋ぎの肉取りが頑丈で、図柄の構図が良い。簡潔に太い竹幹を中央に陽彫り、雨に打たれた折れ枝や葉を陰透しする。この図は好まれ、後代の作にもよく見られるが、代が下がるにしたがい耳や透しの線が細くなる。

京から江戸の郊外・赤坂に移り住み、尾張鐔の強靭さと京透しの精巧さ、肥後鐔の作風をも自派にとりいれた赤坂派の初代から二代の作と思われ、保存証で古赤坂に極まる鐔。赤坂派は鉄味良好に図柄の斬新さでその地位を確立した。江戸前期。

◆縦八一・二㎜　横七九・七㎜　厚さ七・三㎜
保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　**十八(18)万円**

古赤坂の厚手の耳

小柄　一琴（花押）

柳下時鳥図　四分一磨地　高彫　甲鋤・毛彫　金・銀象嵌色絵　裏・赤銅磨地時雨鑢

落ち着いた色合いの四分一地に、柳の下に飛ぶ時鳥を高彫する。枝垂れる柳の枝は力強く甲鋤彫し、時鳥は小さく高彫金銀色絵、毛彫で翼の羽毛をしっかりと彫る。時鳥の下方には金砂子象嵌で光る水面か、あるいは初夏の晴れやかな空気感を描く。裏は赤銅で表裏の地金を変え、手の込んだ仕立てである。

一琴は船田氏。文化九年、出羽国庄内生。幼少時に養父・熊谷義信に彫技を学ぶ。15歳の時に父に従い江戸に出て義信の師である熊谷義之に師事する。文政11年、17歳の時に後藤一乗の弟子となり、天保九年27歳で「一」の字を許され「一琴」と名乗る。庄内藩の抱え工となり江戸と庄内を往復して弟子を養成する。橋本一至とともに京の後藤一乗門下の双璧をなす。文久三年52歳没。

今回の図は誠によい。幕末の京の空気感が鮮やかに切り取られている。一琴の作風は、得意の甲鋤彫に代表されるように豪快でおおらかな男性的な面が強調され、本作は銘こそその通りであるが、その絵心も素晴らしく、現在では一乗門下随一の優工との評価を得ているのも納得がいく。幕末。

特別保存刀装具鑑定書付
上製落し箱入り　八十五(85)万円

鐔　無銘　稲川派

群馬図　赤銅七々子地　木瓜形　高彫　金・銀色絵　耳・角耳小肉　七々子打ち

赤銅七々子地に群馬を高彫する。金色絵の馬と赤銅に銀色絵を入れた馬が計十頭、さまざまな姿でのびやかに群れ遊んでいる。馬のたてがみや尾、筋肉に毛彫を入れ躍動感あふれる。

稲川派は柳川直政の高弟として腕を磨き、のちに一家を興し、名人上手としてその名が聞こえた稲川直克に代表される。赤銅七々子地に高彫色絵の工法で、極めて堅実で穏健な作風である。本作も柳川の流儀を忠実に踏まえ、耳にもきちんと七々子を打ち、たくさんの馬を彫って豪華である。江戸中期。

◆縦八二㎜　横七五・九㎜　厚さ六・七㎜
保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　二〇(20)万円

映える耳の金象嵌

鐔　無銘　吉岡

桐紋透し図　赤銅七々子地　木瓜形　透し彫　耳・肉彫金色絵

鐔の耳際を赤銅七々子地に仕立て、桐紋を金色絵し、唐草と繋ぎ、グルリ連綿と肉彫とする。鐔の上下には桐紋を透し彫し、華やかで品格がある。

吉岡の初代・重次は京で生まれ、慶長年間に徳川家康に召し出される。徳川幕府の抱工として権威ある家柄となり因幡介の官位を受領し、幕末の九代・重貞にいたるまで繁栄する。江戸時代を通じ、吉岡家の主な業務は将軍家佩用や贈答品の太刀金具の制作であり、それらは全て無銘である。本作もその一つで、拵に装着の時は耳の装飾が映える。吉岡の鐔の見どころは耳にあるといってもよい。江戸中期。

◆縦七四・四㎜　横六八・四㎜　厚さ五・三㎜
特別保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　二十八(28)万円

鐔　無銘　水戸

九曜紋散し図　鉄地　葵木瓜形　鋤出彫　小透し　金象嵌　耳・鋤残し三つ棟

まことに大きな太刀鐔で、鉄地に中央の大切羽(せつば)部分は少し高く彫って七々子をうち、周囲は鉄磨地。そこに金象嵌で九曜紋を表に八つ、裏に二つ入れる。金色が鮮やかで落ちは一切ない。中央の七々子もガッチリむらなく彫ってあるが地が鉄であるのでさぞや大変なことであったろう。時代は江戸後期と見られるので太刀鐔であっても新々刀の半太刀拵用に作られたのであろう。そうなればこの特大の大きさにも納得がいく。九曜紋は熊本の細川家など、平氏良文流での氏族が多く使用する。それらの家門または連枝の武士からの注文品と思われる。

鑑定書で水戸に極められた。水戸は江戸後期の斉昭の頃から藩の支援策もあって、金工たちは大いに栄えた。幕末から明治にかけての繁栄ぶりは諸国を圧倒しており、近代彫金の母体の一つとなる。幕末。

◆縦一〇四・四㎜　横九七・七㎜
厚さ四・六㎜
保存刀装具鑑定書付
上製箱入り　十八万五千(18.5)円

鐔　七十叟守平（花押）昭和四十四年己酉長月

雷公の図　素銅磨地　障泥形　金・銀・赤銅平象嵌
片切彫　薄高彫　耳・打返し

磨きあがった素銅地に大きな雷神を力強く彫る。雷神の体の輪郭をしっかりと毛彫し薄高彫を加えて赤銅色絵する。角、飛び出した眼の白目、手に持つ桴の先端や足輪を金色絵し、目玉は赤銅、歯は銀色絵、口中は素銅、背負う太鼓は金と赤銅にするなど色金使いが巧みである。また鋭い片切彫で髪など雷神の風圧を表現する。裏は急な雨に見舞われ駆け足する旅装束の武士を毛彫し、雷公を称える物外和尚の賛を金平象嵌する。武士の背の、丸に二の字の家紋を小さく銀平象嵌するなどこまかい。

柳川守平は昭和を代表する現代金工。明治32年、東京生まれ。14歳の時に豊川光長の門人・吉岡光重に学び、後に二代・豊川光長の門人となる。はじめ光雄と名乗り、独立後に守平と改める。昭和46年72歳没。本作は70歳の晩年の力作。千葉県市川市真間に住み、号は一有子・真柳叟・不老叟などを使った。現代。

◆縦八六・六㎜　横八十・九㎜　厚さ四・二㎜

保存刀装具鑑定書付

上製箱入り　七十五(75)万円

大きな共箱

小柄　無銘　平田

束ね蓮図　鉄磨地　金線七宝象嵌

鉄地に蓮花と葉を束ねた図を金線七宝象嵌する。蓮の茎、花弁と葉の葉脈の輪郭を金線で区切り、あいだのくぼみを青金・赤金など、色彩豊かに七宝象嵌する。平田十代・春行に同図がある。

江戸時代、幕府の抱え工として一子相伝で受け継がれた七宝の技術は、明治以降、勲章・賞牌・装身具など、日本の大きな産業となった。銀座当店の近くにも安藤七宝店という大きく立派なお店があった。幕末。

保存刀装具鑑定書付

上製落し箱入り　二〇(20)万円

拡大

脇差　於南紀重国造之

（元和―紀伊）

江戸初期　約三八五年前

鎬造り　刃長一尺三寸三分（40・3㎝）反り三分

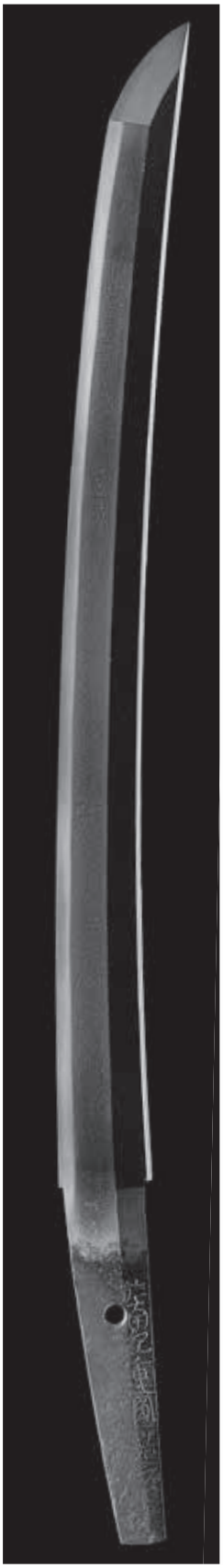
元巾一寸七厘　先巾七分九厘　重ね二分四厘

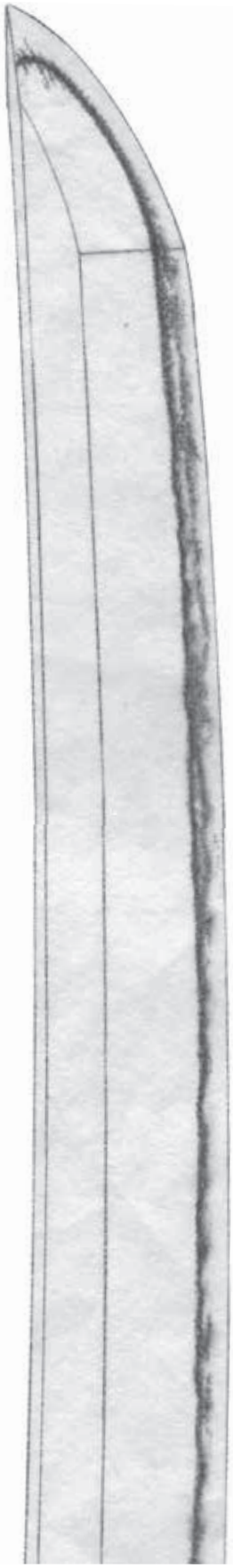
長さは小ぶりな脇差ともいえるが、身巾広く、重ね厚く重量があり、鎬高く棟を卸し、先反りついて、中切先の力強い姿。地鉄、板目に流れ交わり、強く肌立ち、地沸ついて地景入り、黒ずんだ鉄色となり、表裏に大板目肌が顕著に現れ、表裏共に沸映りがたつ。刃文、小沸づいた中直刃に浅いのたれ交じり、匂い深く処々に喰違いや小互ノ目を交え、砂流しや、足入る。帽子、直ぐに小丸、わずかに掃きかける。

重国は慶長年間に徳川家康に仕えて駿府（現静岡市）において作刀し、その後元和五年、家康の第十子徳川頼宣に従って紀州和歌山へ移住した。名誉の工であり、腕前も新刀最上作に列せられる。作風は大和手掻を彷彿とさせる直刃の作と、相州上工の作を範にとった乱れ刃がある。本作は姿も出来も前者の作風で、刃の沸づき深く、地のうねるような板目・杢目の現れ方は出色なものがある。康継・繁慶と並ぶ名誉の工で、古くから名声高く、本作の地刃の出来ばえからもその評価は裏付けられる。

金着二重鋼　白鞘

特別保存刀剣鑑定書付　　一五〇(150)万円





全身を除いて原寸

刀　肥前国住藤原忠広（ただひろ）（初代銘）

（寛永―肥前）

江戸初期　三九〇年前

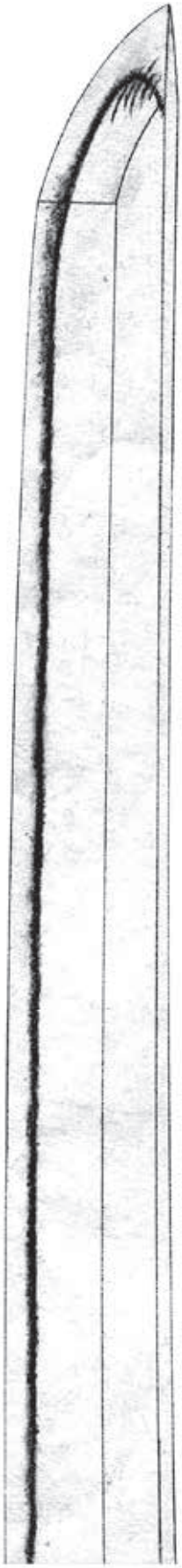
鎬造り　刃長二尺四寸八分（75・1㎝）反り五分
元巾一寸強　先巾六分六厘　重ね二分一厘

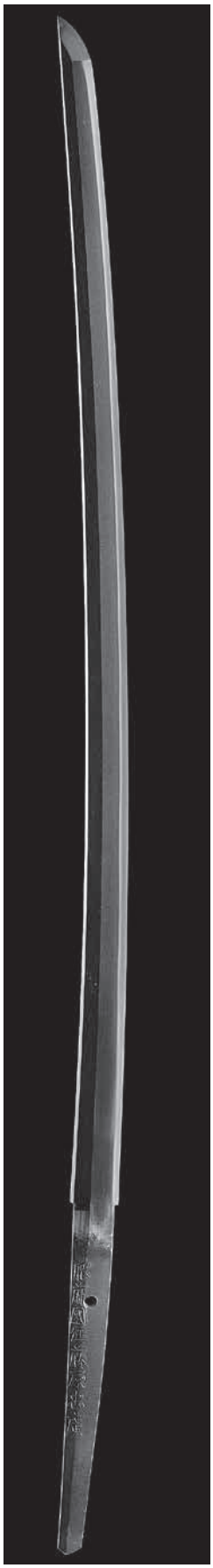
ごく長寸で、身巾やや細めに反り浅く、重ね頃合いに中切先のすらりとした姿。地鉄、小板目がよくつんで錬れ、地景細かく入り、地沸厚くついて強い地鉄となる。刃文、中直刃で匂い深く小沸よくつき、喰違刃も入る。帽子、直ぐに小丸、やや掃きかける。

人気高い肥前・初代忠吉の長刀である。忠吉は初め肥前国忠吉と五字に切り、次に住人忠吉銘を併用するようになり、晩年の元和十年には武蔵大掾を受領して銘を忠広と改める。また寛永七年八月からは、武蔵大掾を冠していない銘も見られ、これは献上銘と称されるもので、藩主・鍋島家からの注文状に武蔵大掾を入れずに銘を切るよう書き添えてあることによるものである。本作はその一振で、銘は太く力強く彫っている。拵は黒色主体の長寸の半太刀拵。地味なようで縁頭は鉄と銀との削継ぎにするなど大変凝っており、名古屋の旧家からでた一振である。

金着一重鎰　拵付（白鞘もあり）

特別保存刀剣鑑定書付　三二〇（320）万円





全身を除いて原寸

黒石目塗鞘鉄揃い金具半太刀拵〈揃い金具＝縁頭・鯉口・足金物・柏葉・小尻〉縁銘・柴田利次（尾張・江戸後期）鉄荒石目地（縁頭の小縁は銀石目。足金物は左右に割れる）〈目貫〉龍図　金地　容彫〈鐔〉螭龍・瑞雲図　鉄地　葵木瓜形　鋤出・鋤下彫　金布目象嵌〈柄〉白鮫着黒糸巻（総長　一一〇㎝）

脇差　井上和泉守国貞（くにさだ）

〈菊紋〉寛文元年八月日

（江戸前期―大坂）三六三年前

鎬造り　刃長一尺五寸（45・4㎝）反り二分　元巾一寸一厘　先巾七分一厘　重ね二分二厘

やや短めの長さの脇差で、元先の巾差つき、反り浅く、重ね頃合いに切先詰まりごころという典型的な寛文新刀姿で、大小の小と思われる。地鉄、表は小板目調にまでつみ地沸が細かにつく。裏は中ごろに大板目風の柾を交えて肌立ち、力がある。刃文、小沸づいた互ノ目にのたれを交え、互ノ目のところは高く、のたれのところは低く焼いてメリハリがつき、刃中匂い深く、細かな砂流しかかり、足が入る。帽子、直ぐに小丸、さかんに掃きかけ返りは長め。

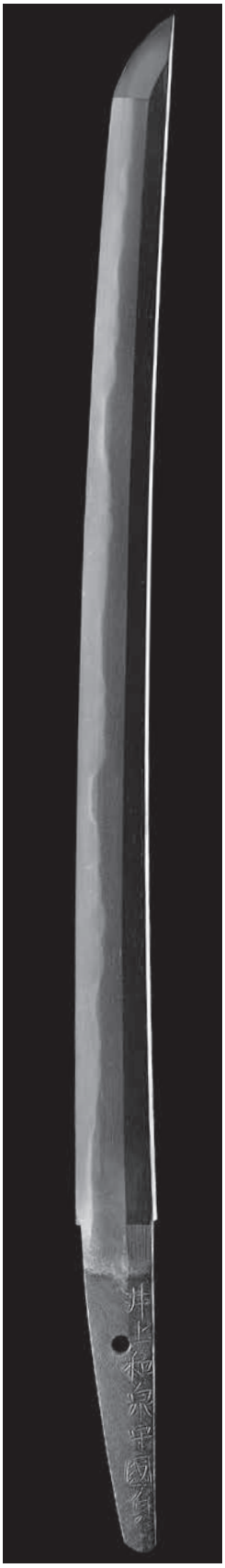
大坂新刀の巨匠・井上真改の32歳の初期作「井上和泉守国貞」銘の優品である。二代目国貞は寛永七年生まれで初代国貞の二男。ちなみに父国貞は次男の真改を大坂に残し、長男・国時を郷里の宮崎に寺の道場を継がせるために帰らせている。ところが本作の翌年の寛文二年九月、大地震によって土地が陥没し、大津波がおこり全村が潰滅したという。今般の能登地震もあって、ついこのようなことも思い出した。さて二代国貞は腕前優れ、父の晩年の慶安ごろには父の代作代銘をなしたという。父没後、承応元年に父と同じ和泉守を受領し二代目となる。承応から万治年間は単に「和泉守国貞」と銘し、寛文元年から十二年までは、本作のように井上姓を冠する。寛文十二年の後半、井上真改と改名（43歳）、大坂正宗とうたわれ天下の名工となる。

金着二重鋼　白鞘

特別保存刀剣鑑定書付　一六〇（160）万円

●次頁に続く

●前頁・国貞の全身



刀　肥後守秦光代（はたみつよ）以地鉄鎖作之

（寛文―尾張）　江戸前期　約三六〇年前

鎬造り　刃長二尺三寸（69・6㎝）反り七分四厘　元巾一寸七厘　先巾七分五厘　重ね二分七厘

長さよく、身巾広く腰反り深くつき、棒樋を刻し中切先、重ねごく厚く重量十分。地鉄、小板目に流れごころ交じり、地沸こまかに美しくつく。刃文、互ノ目にのたれ交じり、小沸出来でやや締まり、刃中明るい。帽子、直ぐに小丸。

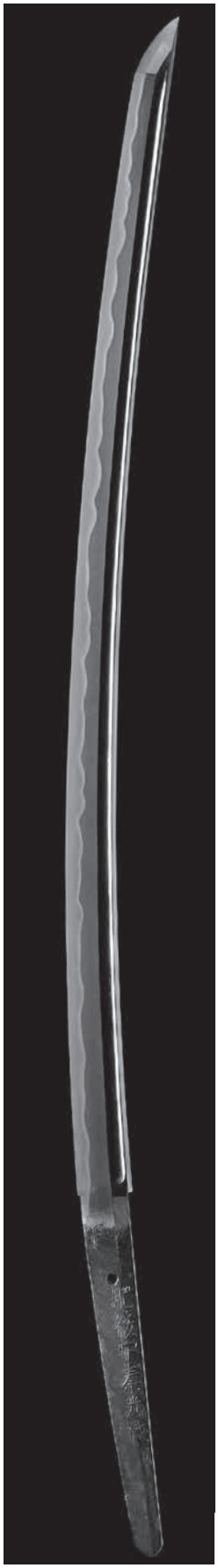
尾張の剣聖・柳生連也斎の抱え鍛冶として世に知られる秦光代。初め江戸の対馬守橘常光につき、のち尾張に来て越中守貞幸の養子となる（のち不縁、別家する）。よって作は尾張関風が強い。尾張名物「鬼之庖丁」との異名のある異相の脇差や、連也斎の終生の差し料で、添え銘に「かごつるべ」「笹の露」とある大小はことに有名。本作は光代の傑作。

金着二重鎧　白鞘　佐藤寒山博士鞘書あり

『新刀大鑑』所載

特別保存刀剣鑑定書付　二八〇（280）万円

全身を除いて原寸



槍　戸川達富使　武蔵太郎安国作之
血吸不知骨　宝永五戌子年

（江戸中期―武州八王子）三一六年前

正三角直槍　穂長四寸八分（14・5㎝）元巾五分五厘
先巾四分二厘　重ね五分一厘（全長44・7㎝）

短めとはいえキリっとした姿の直槍で、ケラ首短く断面は正三角で極めて立体的である。地の三面の中央には細樋を入れる。地鉄、小板目がつみ、地沸がつく。刃文、細直刃で刃縁が小沸で沸える。帽子、直ぐに小丸で一つの面は掃きかける。

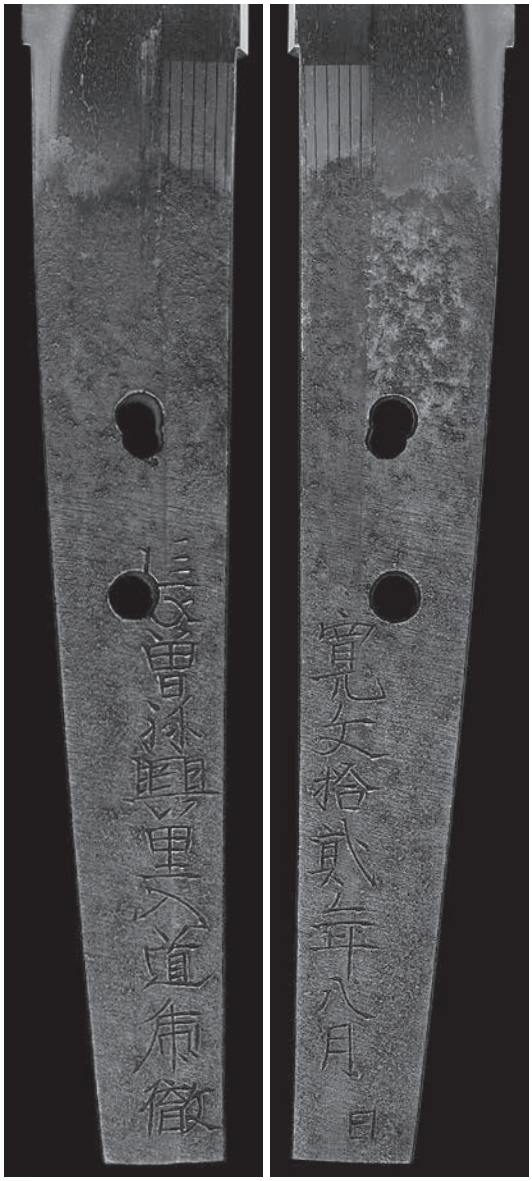
安国は武州下原（八王子）の新刀期における代表工。武蔵太郎安国という語呂のよさからも、当時から人気工であったという。ただ写された品も多く、識者泣かせの工でもある。そして今回の槍。安国に槍など見たことがない。しかし二代の年紀が入り、添え銘よく、出来はなまじの工のものではない。審査に出しておいたら合格した。珍品この上ない。

白鞘　保存刀剣鑑定書付　三〇(30)万円

脇差　長曽祢興里入道虎徹（こてつ）
寛文十二年八月日

（江戸前期―江戸）三五二年前

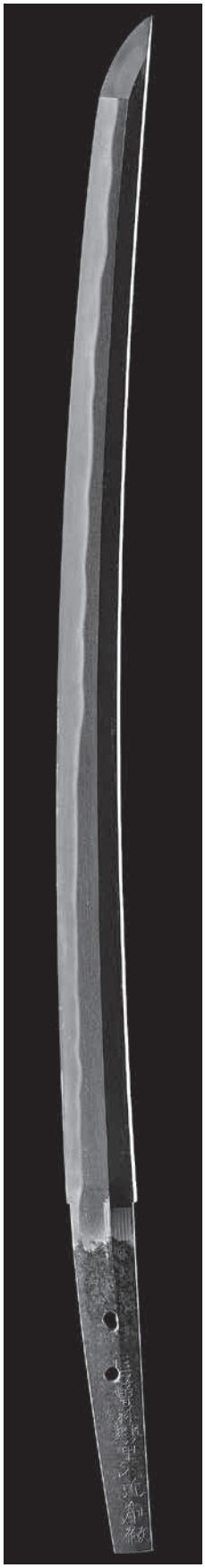
鎬造り　刃長一尺六寸七分半（50・7㎝）反り四分弱
元巾九分九厘　先巾六分六厘　重ね二分五厘



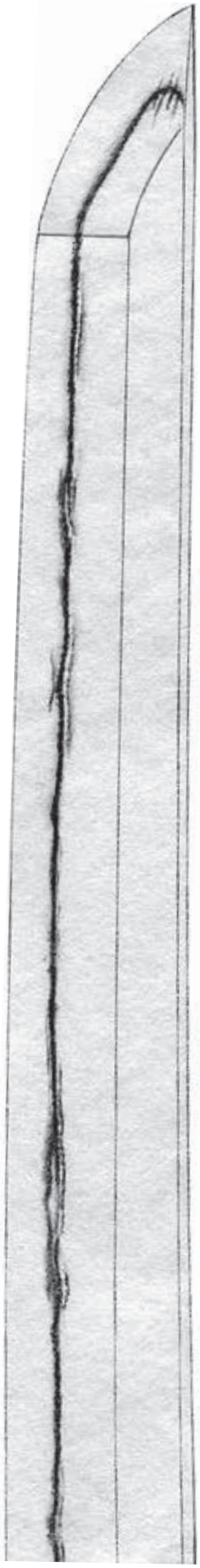
わずかに磨上げて中心（なかご）先をつまんでいるが、脇差としては頃合いの長さで、反り浅めに身巾ほどよく、先やや狭まり、重ね厚く重量があり、中切先で姿整う。地鉄、小板目がよく錬れてつみ、地沸厚くついて地景入り、強靭な鍛えとなり冴える。刃文、焼き刃の高い直ぐ調に太い足が入り、小沸よくついて匂い深く、互ノ目を交えて数珠刃風となり、明るい。帽子、横手上でくびれ込み、直ぐに小丸。

江戸新刀を代表するというか、現在、人気絶頂の長曽祢虎徹のスッキリした脇差。珍しく年紀が入り、寛文十二年というと60歳少し前の作である。虎徹の大成期は寛文十年（57歳）から延宝四年（63歳）といわれているからちょうどその中に入る。刃文はそのころによく見かける数珠刃（じゅずば）風の典型なもので、足の太く入るさまや、くびれ込んだ帽子などはいかにも虎徹らしい。虎徹はもと越前の甲冑師で、刀鍛冶に転向して江戸に出てきたのは50歳ごろであり、その探究の姿は現代でも称賛以外のなにものでもない。本作は磨上がっていることをまったく感じさせず、地刃は虎徹そのものの出来で、年紀も入り『虎徹大鑑』にも所載の優品である

金着二重鎺　白鞘　『虎徹大鑑』所載
特別保存刀剣鑑定書付　八〇〇（800）万円



全身を除いて原寸



刀　奥和泉守忠重（ただしげ）作

（宝永―薩摩）

江戸中期　約三一〇年前

鎬造り　刃長二尺三寸強（69・8㎝）反り六分　元巾一寸一分二厘　先巾七分五厘　重ね二分五厘

長さ頃合いに身巾広く、元先に巾差ややつき、重ね厚く反り深くついてドッシリとした重量がある。佩き表に摩利支尊天の文字彫、裏に梵字三ケを深鑿で刻する。地鉄、よく錬れた柾目が小板目にまでつみ、地沸こまかくよくつき美しい。刃文、小沸づいた広直刃が浅くのたれ、二重刃や喰違刃がしきりとかかる。帽子、直ぐに先き掃きかけて小丸。

忠重は薩摩奥系の祖・忠清の三男。当地で刀工一家として栄え、高名な奥大和守元平はこれより三代下がったところの子孫である。忠重は作刀に熱心で大坂に行き越前守助広の門にも入った。没年は享保十年、刀剣需要の少ない江戸中期にあたるため作品の数は少ないが、忠重の「かぶと割り」といって斬れ味は賞味された。本作は彫りもあって忠重の傑作。拵は幕末製作の典型的な薩摩拵の優品。金具の作者・平良真は幕末の薩摩刀工。鉄金具造りで質実であるが、鞘塗りが凝っており全体に明るい印象である。

金着一重鎺　拵付（白鞘もあり）

特別保存刀剣鑑定書付（拵も同）

『新刀大鑑』所載　二三〇（230）万円

全身を除いて原寸　●次頁に続く

●前頁・忠重の拵

漆紋様抜き薄茶石目塗鞘薩摩打刀拵

〈総金具〉 縁に銘 平良真／以完栗鉄作 鉄磨地頭の猪目透しに金板貼り 〈鐔〉 平良真以完栗鉄造／慶応三年卯十一月 水玉透し 鉄鎚目地 入り木瓜形 〈柄〉 黒漆塗地 黒糸平巻（拵の総長一〇三㎝）〈拵も特保証付〉

刀 粟田口近江守忠綱（ただつな）

延宝二年二月日

二ツ胴土壇越至平地斬者小松十右衛門

（江戸前期―大坂）三五〇年前

鎬造り 刃長二尺三寸六分（71・3㎝）反り五分二厘強 元巾一寸六厘 先巾六分六厘 重ね二分五厘

長さよく、反り頃合いで元先に巾差ついて重ね厚く重量があり姿整う。地鉄、小板目よく錬れ、地沸厚くついて地景細かに入る。刃文、焼きの高い頭揃い気味の丁子刃、足長く入り、匂い深く小沸ついて冴え、長い金筋・砂流しかかる。帽子、直ぐに小丸。

元禄期の大坂新刀を代表する忠綱の刀である。初・二代あり、焼き頭の揃った足の長い丁子乱れは両者とも得意とする。本作は地刃ともに得意の作域の傑作であるとともに中心（なかご）の截断銘がよい。大坂新刀には珍しく思うが、さすがの斬れ味である。拵もよい金具で揃えており、縁頭の仙台清定は典型作。

金着一重鋼 拵付（白鞘もあり）

『刀剣美術』出題刀（令和5年11月号）

特別保存刀剣鑑定書付 三四〇（340）万円

全身を除いて原寸

黒石目塗鞘打刀拵〈縁頭〉仙台住清定　雨龍図　赤銅石目地　金線象嵌〈目貫〉竹に虎図　赤銅地容彫　金色絵〈鐔〉伊勢海老透し　鉄地　丸形透し彫　丸耳〈柄〉白鮫着黒糸巻（拵の総長九八・五㎝）

刀　薩伯耆守平朝臣正幸（まさゆき）　寛政五年二月日

（江戸後期―薩摩）二三一年前

鎬造り　刃長二尺二寸強（66・7㎝）反り六分強　元巾一寸一厘　先巾六分九厘　重ね二分二厘

江戸後期の薩摩を代表する正幸の刀。正幸は活躍する時期が長く、本作は61歳であるが、70歳を超えても豪刀・優品を見かけ、85歳まで作刀した。

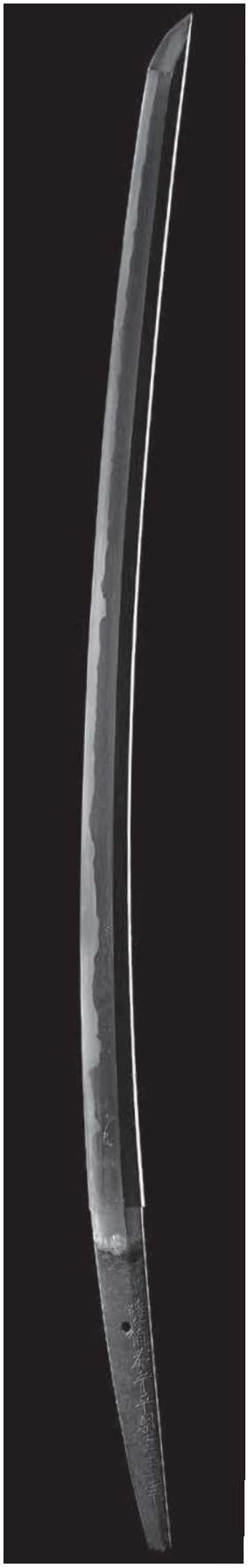
本作は正幸にあっては尋常な定寸の姿で、鎬巾狭く鎬高く重量がある。地鉄、地沸が厚くつき詰むも、大板目や柾風の流れを交えたネットリとした肌合い。刃文、小のたれ調の互ノ目に尖り刃を交え、元の方は特によく乱れ、沸深く荒沸つき、芋蔓かかって変化に富む。帽子、浅くのたれて小丸。拵は高級なものではないが「返り」の形からも同国の薩摩拵。

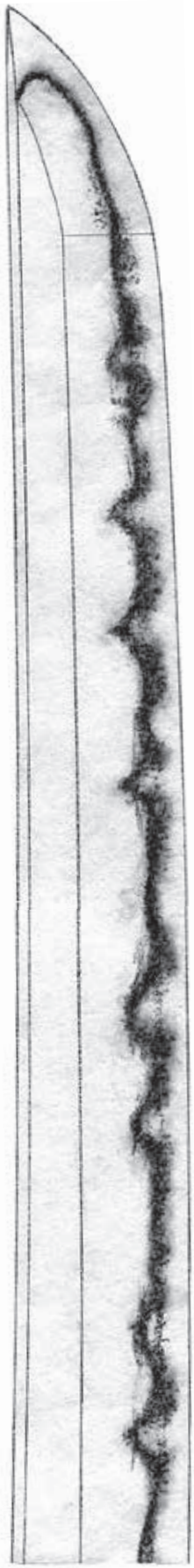
銀着二重鎰　拵付（白鞘もあり）

特別保存刀剣鑑定書付　一五〇（150）万円

●次頁に続く

●前頁・正幸の刃文・全身・拵





全身を除いて原寸

焦げ茶漆塗鞘薩摩打刀拵〈縁頭〉安親と銘あり　祇園社頭図　四分一磨地　高彫　金・赤銅・素銅色絵〈目貫〉獅子図　赤銅地　容彫　金色絵〈鐔〉無銘　上下袋結び図　鉄磨地　丸形　肉彫透し　金線布目象嵌　銀布目象嵌〈小尻〉無文　銀磨地〈柄〉白鮫着黒糸巻（拵の総長　九四・五㎝）

刀　川部儀八郎藤原正秀（花押）（刻印）

文化十二乙亥二月吉日
余之於石井氏交情日旧而石井氏之
於刀剣者好誠厚矣於是乎鍛以贈之

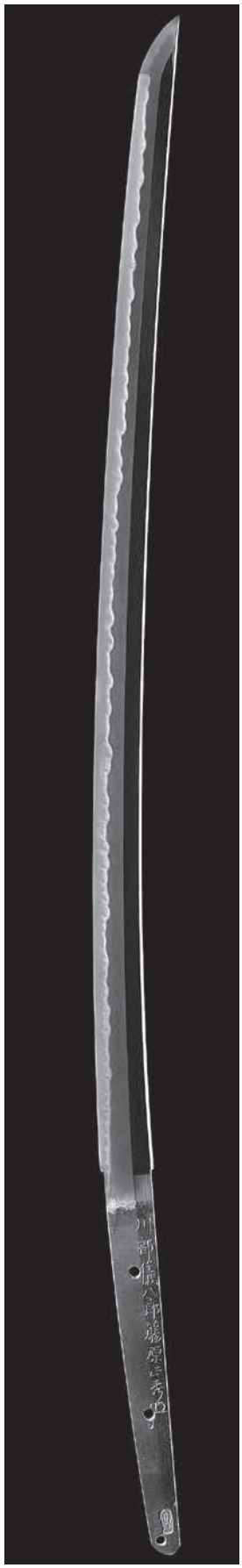
（江戸後期―江戸）二〇九年前

鎬造り　刃長二尺三寸（69・5㎝）反り四分六厘　元巾一寸六厘　先巾七分　重ね二分四厘

しっかりとした長さに身巾広く重ね厚く、反りや浅めに先やや細まり中切先の凛々とした姿。地鉄、小板目がよく錬れてつみ、地沸こまかにつき、小さい地景がよく入る。刃文、小沸のついた小丁子をきれいに連らね、匂い締りごころで逆がかり、刃中に足よく入り、明るい。帽子、浅くのたれて先き小丸。

新々刀の開祖にして最上作の水心子正秀、六十六歳の作である。文化・文政ころの水心子は復古論を実践して、古備前風の小丁子乱れの作が多くなり、焼刃低めで姿も比較的優しいものが多くなってくる。使いやすさと刀が折れないことを第一義においたためという。しかし本作はがっしりした刀で、重ね厚く重量があり、あたりを払う雰囲気がある。これは為銘（ためめい）に見る石井氏の好みもあるのだろう。ともかく中心（なかご）が素晴らしく、中心味（こみあじ）よく銘文もまたよい。正秀は学識高くいろいろな漢文を入れた作を見るが、ここまで長文で丁寧なのは少ない。かしこまって見入ってしまう内容とまた上手な字体である。この三年後、子の貞秀に正秀銘を譲って天秀に改銘する。

特別保存刀剣鑑定書付
本阿弥光遜師鞘書あり（昭和28年）
金着一重鑞　白鞘　三〇〇（300）万円



全身を除いて原寸

短刀　宗次（むねつぐ）作

（天保―江戸）

江戸後期　約一九〇年前

平造り　刃長六寸二分（18・8㎝）反りなし　元巾六分六厘　先巾四分八厘　重ね三分

小ぶりで、重ねのごく厚い鎧通しの造り込み。地鉄、板目が錬れて肌立ち、柾を交え、地沸厚くついて力強い。刃文、小沸が締まり、匂い口の明るい三本杉風の尖り互ノ目を連らね、こまかい砂流しかかる。帽子、のたれ込み小丸。

江戸後期を代表する固山宗次の短刀。銘振りから天保ころ三十歳代の作で、宗次売り出しのころで、意欲ある作品が多く、この時期三本杉刃はよく見かける。形からしても戦国時代の関伝をねらった優短刀といえる。金着一重鎺　白鞘

特別保存刀剣鑑定書付　七〇(70)万円

日本刀「現存の優品」㊼　令和6年4月1日　発行　発行所／㈱刀剣柴田

〒104-0061
東京都中央区銀座5-6-9
電話番号／03-3573-2801　FAX03-3573-2804

1階の内部

地下の展示室

すずらん通りから見た新店舗1階の外観

移転しています。
新店オープン！

3軒となりに引越しました。(1昨年3月に)
旧ビル建替えのため10m先の(1階・地階)
に新装開店しています。
新しい店は気持ちよいです。即売会にお
越しください。

〒104-0061
東京都中央区銀座5-6-9(1階と地下)
(旧店の5-6-8の最後の「8」が「9」になりました。)

銀座刀剣柴田

郵便番号・電話番号・Fax などに変更はありません。